富士に祈る 64

國學院大學兼任講師　城崎　陽子

信仰と伝承 ―岡野聖憲・その18―

太陽神殿碑（北本市）

先回は、大陸での戦局が深刻になるなか、聖憲がこれを日本精神作興の好機と捉えて、会員への説諭につとめ、三聖地巡拝実行への目途をつけるまでを記した。今回は、いよいよ物資が不足していく中で会員に産業指導を行い、これまでの自らの歩みを「太陽精神碑」に象徴させ、皇紀二千六百年を機に、さらなる進展を図る決意を聖憲が固めたところまでを記す。

昭和十四年（一九三九）欧州を中心に、第二次世界大戦が開けたころ、日本でも物資の不足が顕著になりつつあった。十月一日には、米穀配給統制法が公布され、石油や木炭が配給制になった。そして、同二十八日には農林省から「肥料消費調整規制」が公布された。こうした状況の中で聖憲は、食料、木炭、肥料の三点に的を絞って、「産業解脱」のスローガンのもと、産業指導を開始したのである。物資の不足は様々な輸送経路をたどることによって、物資が消費地に的確に届かないことに一因があった。そこで、薪炭商をしている兵庫県と群馬県の両県の会員に東京へ直接木炭を送らせ、これを安価に売り捌くことをした。また、千葉県の海岸に打ち捨てられていた「海菜（海藻）」の食糧・肥料への転用を考案したのも聖憲である。採取した海菜を試験的に加工してみることで「海菜海苔」が開発され、食用に適さない部分は肥料として用いられるようになった。そして、昭和十五年（一九四〇）のはじめにかけて、「解脱産業互助振興組合」を組織し、一層の産業振興に力を尽くした。

産業指導が成果をあげる中で聖憲が次に目指したのは、紀元二千六百年を迎える昭和十五年の紀元節に「太陽精神碑」を建立し、その記念式典を催すことであった。碑の中央に赤い日輪を据えた「太陽精神碑」は、聖憲がこれまで歩んできた道程を集約し、これから未来へと歩み出す一切の出発点を象徴するものであった。昭和十五年二月十一日に行われた太陽精神碑建立除幕式典に臨んだ聖憲は、その碑に供えられた五穀を粉砕し、混ぜ合わせた上で、全国の会員へ発送したのである。そこには、次のような聖憲の思いが込められていた。

これを日々の食物に混入して全身全霊をもって玩味し、子孫に対して絶対幸福の道を執られた祖先の余慶余徳を追憶し完全に知覚せられよ。そして、その中で生まれた気づきを先ず家族で共有し、子孫へと永遠に伝えてゆかれよ。

しかし、聖憲の心が総ての会員に間違いなく受け止められたわけではなかった。会員の中には、飼料と間違えた者もいれば、篩にかけて、五穀を

選り分けて餅を搗いた者もいたという。聖憲の意図が染み込むように伝わっていくのは、食糧事情がますます悪化する事態を迎えてからであった。

「産業解脱」や「太陽精神碑建立」、慰問品の収集といった解脱会の活動を推進していく中で、聖憲が考えていたことは「宗教」という抽象的な概念への意義づけであった。聖憲が考える「宗教」とは、「生活」の中に溶け込み、国家や社会へ奉仕し、産業を振興させ、その上で本来の道を歩み、自らを磨いていくものである。聖憲が示す「生活即宗教」という考え方と「産業解脱」の実践こそが、「霊修業」を禁じた聖憲にとっての教えそのものであったのだ。同時に、こうした志向は民衆宗教の歴史において繰り返される志向であることにも気づく。小谷三志や伊藤六郎兵衛が説いた教えも、既にこうした考え方を内包するものであったことは指摘するまでもない。

昭和十五年四月一日の「宗教団体法」施行によって、解脱会は「宗教結社解脱報恩感謝会」として、新たな看板を掲げることになった。しかし、その一方で醍醐派とも縁を切ることなく、その絆を保っていく道を選択したことには、聖憲の醍醐派に対する恩義があったからであろう。

そして、昭和十五年十一月十日、紀元二千六百年式典当日を迎えた。両陛下を迎えての式典に埼玉県代表として臨んで、聖憲は天孫降臨以来の日本の歴史を思い、その二千六百年の歴史の流れの中にある自身への感激を胸にしていた。奉祝会が行われた翌日を含め、両日ともに、町には提灯行列が行われ、花電車が走った。この二日間の感激を聖憲は十一月号の月報に「恭しく天顔を拝し奉る」と題して次のように記している。

凡そ臣節を完うするの道は忠孝に存し、今に於て想えば、聖憲、志を解脱に発し、高く紀元を寿ぐ万歳の奉唱が、一に解脱報恩感謝に湧き、いざ皇国の御為めに、此の身此の骨を捧げばやと、強き決意を固めまして、十年の歩行唯だ愛国の一途を踏み来りましたことは、自ら深く顧みまして、今日此の佳き日に列り、恭しく天顔を拝し奉りました。（中略）思うに我れに神護あり、常に萬霊魂の加護あり、願くば此の大赤誠を寸刻も忘れず、いよいよますます大日本民族たる価値の高揚を励みまして、一層、諸子と共に御奉公を念願するものであります。

それは、敬神崇祖、報恩感謝を旨とし、国民精神作興の道をめざした聖憲の十年間の歩みを振り返っての感激でもあった。

絵・橋本豊治

釋尊の教えは多い 29

句・菅谷秀文

や　八つある実践の道八正道

涅槃に至る八つの道をいう。

正見　正しく物事を見る

正思　正見に基づいて正しく物事を考えること

正語　正見に基づいて正しい言葉を語ること

正業　正見に基づいて正しい行いをすること

正命　正見に基づいて正しい生活を営むこと

正精進　正見に基づいて正しい努力を行うこと

正念　釈尊の教えを正しく記憶して忘れないこと

正定　正しい瞑想を行うこと